パックスブリタニカアルビオン改造計画

poo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パックスブリタニカアルビオン改造計画

【Ｎコード】
Ｎ７１４２Ｍ

【作者名】
ｐｏｏ

【あらすじ】
とにかく過去の歴史上の人物をアルビオンにぶち込みオリキャラを混ぜ出来上がったアルビオンは果たしてその国力を持ってパックスブリタニカを成し遂げられるのか？
注意を受けましたがこの話は前提が吹っ飛んでいますので無理だという方はやめておいてください。

レコン・キスタ殲滅戦（前書き）

なんでこんなの書いたのか今でも不思議

レコン・キスタ殲滅戦

レコン・キスタ殲滅戦

私エリス・ハーフィールドが十歳のときその戦争は起きました。前々から活動していたレコン・キスタなる組織が蜂起したらしいのです。彼らが首都攻略のために絶対通らなければならないのが私の父が治めるウェストミッドランズ領とその前にあるコンノート公爵領なのです。ウェストミッドランズはウルバーハンプトン、ウォルソール、バーミンガム、ダッドリー、ウェストブロミッジからなる広大な土地でアルビオン工業の中心地なのです。今回蜂起したレコン・キスタ軍総勢４万フネが５隻といったところだそうです。しかもかわいそうなことに彼らが最初にぶつからなければいけないコンノート公はアルビオン王立陸軍元帥にして「鉄壁」の二つ名をもつスクウェアメイジなんだぞ。父上が自分のことのように話していました。

「お父様。何の準備をしているんですか？」

「戦だよ。コンノートのやつに助太刀しに行くんだ」

「私も行きます！！」

「だめだ」

「私だって風のトライアングルで水のラインメイジです！」

「そうはいっても亜人退治とは違うんだ。簡単に人が死ぬ。時に人は亜人より残虐だ」

「連れて行ってやったらいいじゃないですかあなた」

「お母様」

「いずれ体験することになることです。人の死を力を振るう恐ろしさを優秀なこの子だからこそ早く学ばせなければならないのではないですか？」

「ヒルダ・・・お前がそこまで言うんなら。エリス、連れて行っ

てやろう。戦場を学べ」
「はい」
領軍約一万はコンノート公爵軍約2万と合流して巨大な鉄の壁の後ろに陣を組んでいた。
「お父様。あの壁は何ですか？」
「なに、見てからのお楽しみだ」
そのときでした。
「敵艦隊だ！」
前方上空に敵艦隊がいました。
「間に合わなかったか？トリントン」
「ハーフィールド。そうでもないらしいぞ」
風石を使うフネから聞こえるはずのない機械音と共に艦隊がやってきた。
「王立中央艦隊だ！」
「あれがアルビオン空軍が誇る最新鋭の第二世代艦？」
「そうだぞエリス。そしてあの艦隊の高速移動を支えているのは我々ウェストミッドランズの技術者達だ」
「私たちの領の？」
「ああ。そうさアルビオンのハルケギニア一の中央艦隊はよく近所散歩してるワットのおっさんたちの努力でできてるんだ」
ドン！ドン！ドン！
圧倒的だった。レコン・キスタ艦隊は瞬く間に殲滅された。
「すごい」
「でもな。エリス、あのフネに何百っていう人間が乗っていてそれがあの一瞬で死んでいったことを忘れちゃいけない」
「何百人・・・それが5隻も一瞬で・・・」
「そうだ。怖いだろう。その怖さを忘れちゃいけない。殺すときに何も考えないやつは壊れてる」
「だがこっからが本番だ」
「エリス嬢。これから地上戦で死んでいく人々を一人一人大切に

焼き付けて力を持つことを学ぶんだ」
「はいコンノート公爵」
「おじさんでいい。其処まで畏まられるような人間じゃないよ」
「敵城壁まであと1リーグ」
「鋼鉄騎士団(アイアンナイツ)起動！」
「城壁が動いた？え！たくさんの鋼鉄のゴーレム？」
「エリス。驚いたか？さあここからは本格的にお前は見学だ」
「は・・・はい」
「総員筒構え。公爵が打ち漏らした敵を一掃する」
ズダダダダダダダダダダダダダダダッ！！！！！！！
ドォンドォン！！
嵐のように吹き荒れる鉄の雨。大砲の弾が敵陣の真っ只中で炸裂する。
引きちぎられていく敵兵。叫びを上げる。家族の名を恋人の名を・・・

これが戦争貴貧の差も男女の差も何もない平等な力あるものだけが生き残る世界。責任ある、力あるものだからメイジは、武器を持つものは戦わなければいけない。愛するものを力の暴力から守るために。

半日後レコン・キスタ軍は本当の意味で殲滅。一人の生存者もなし。アルビオン軍は死者１２６５名負傷者４３２７名だった。
その夜私は黙って優しく胸を貸してくれる父にすがり付いて泣きつかれて眠るまで泣き続けた。安全な領内でぬくぬく育ってきた私には人の命は力を振るう責任はまだ大きかった。

レコン・キスタ殲滅戦（後書き）

なんじゃこりゃーーーーーー！！！こんなはずでは！

登場人物（前書き）

ネタバレ注意。まだほとんどでてきていないので見たらだれそれ！とか、あぁこの人でるの。みたいになるので気をつけて

登場人物

登場人物（原作キャラ除く）

・エリス・ハーフィールド・・・主人公風と水のスクウェアメイジ。膨大な精神力を持つ。

・ヒルダ・ハーフィールド・・・主人公の母。水のトライアングルメイジ。二つ名は「癒し」

・フランシス・シーモア・ハーフィールド・・・主人公の父。風のスクウェアメイジハーフォード侯爵。元アルビオン空軍中将。二つ名は「征嵐」

・アーサー・ウィリアム・パトリック・アルバート・コンノート・・・アルビオン陸軍元帥。コンノート公爵。土のスクウェアメイジ。二つ名は「要塞」

・アーサー・ハーバート・トリントン・・・アルビオン空軍提督。戦艦「ミズーリ」艦長。トリントン伯爵。風のスクウェアメイジ。二つ名は「制空」

・エドワード・ホーク・・・アルビオン空軍少佐。風のトライアングルメイジ。男爵

・アダム・ダンカン・・・アルビオン空軍大佐戦艦「ミズーリ」副艦長

・エドワード・コドリントン・・・アルビオン空軍大佐。巡洋艦「ビクトリー」副艦長

・リチャアード・グレンビル・・・アルビオン空軍少将戦艦「バンガード」艦長

・ホレーショ・ネルソン・・・アルビオン空軍中将。巡洋艦「ビクトリー」艦長。男爵。風のラインメイジ

・フランシス・ウェルシンガム・・・アルビオン情報局局長。国内外に諜報員を置き、情報を収集分析している。かつて国王暗殺を未然に防いだこともある。

・ジェームズ・クック・・・通称キャプテンクック。元アルビオン空軍大佐。探検家。
・ジェームズ・ワット・・・いわずと知れた蒸気機関の人。
・ウィリアム・マードック・・・石炭ガスを実用化した。ワットの元で働く。
・ヘンリー・ベッセマー・・・自溶製鋼法（ベッセマー法）の発明者。
・ウィリアム・ジョージ・アームストロング・・・水力起重機（クレーン）や尾栓式後装旋条砲（アームストロング砲）の発明者。アームストロング製作所所長。
・リー・エンフィールド・・・リー・エンフィールド銃を開発した。エンフィールド製造所所長。
・レジナルド・ミッチェル・・・零式艦上戦闘機を解析し、スーパーマリーンスピットファイアを設計。
・ジェフリー・デハビランド・・・レジナルドと共に零式艦上戦闘機を解析しデハビランドＤＨ－９８モスキートを設計。デハビランド・エアクラフト社長。
・ノエル・ペンバートン・ビリング・・・スーパーマリン社長。
・チャールズ・アルジャーノン・パーソンズ・・・アームストロング製作所に勤める。フネに搭載する蒸気タービンの地位を確立する。
・ジョージ・スティーブンソン・・・蒸気機関車「ロコモーション号」「ロケット号」の開発者。
・パトリック・マンソン・・・医師。寄生虫学者。ハルケギニア中の寄生虫を調べている。
・チャールズ・スチュアート・ロールズ・・・ロールス・ロイス社長

登場人物（後書き）

まだ増えるかもよ

怖いものなし（前書き）

頑張るぞ

怖いものなし

怖いものなし

「ウォルシンガム。此度のレコン・キスタの裏には何がいる？」
「今のところ詳しくは分かっていないですが。トリスティンにはそのような力はないですしゲルマニアも今は国内に専念しています。ロマリアがわざわざ王家をつぶすこともないとすると。一番怪しいのはガリアです」
「ジョゼフか・・・無能王などというのは噂だけか」
「ウェールズ。空軍のほうはどうだ？」
「それについては私からお話いたしましょう」
「トリントン伯爵。お願いしよう」
「中央艦隊からロイヤルソヴリンを引退させます」
「なに？」
ロイヤルソヴリンはアルビオン空軍の象徴ではないのか？
「もはや第二世代艦隊の動きに旧世代艦のロイヤルソヴリンはついていけないのです。そこで一旦引退し改修。その後地方艦隊旗艦として復帰します」
「中央ではないのか？」
「はい。まもなく完成するペンシルバニア級はともかくそれ以降の戦艦は超ソヴリン級とでもいうべき二百メイル越え艦艇なのです」

「アルビオン軍が破ったレコン・キスタがこのゲルマニアに勢力を置いている可能性もある」
「至急調査いたします」
遠くない未来その予想は現実となる。

「アルビオンがレコン・キスタなるものを殲滅したそうだ」
「やはり王家がゆらぐはずないな」
「ははははっ！」
その考えは愚かであったことを彼らは知る。

私は目の前のフネを見ていた。
「お父様何故我が領に戦艦があるのです？」
「次世代の第三世代戦艦への試作。二・五世代戦艦で我が領で運営することになったのだ」
「凄いですね」
「そこでこの戦艦ドレッドノートの艦長をエリス。お前に任せる」
「？・・・なんでですか！」
「このドレッドノートで経験を積ませ将来ある空軍の一隻の戦艦を任せようと思っている。これは陛下とも話し合って許可を取ってある」
「はぁ。ドレッドノート・・・怖いものなし、ですか」
「ああ。いい名前だろう」
「分かりました。エリス・ハーフィールド。戦艦ドレッドノート艦長の任。拝命いたしました」
その頃二隻の巨大戦艦の建造が始まっていた。

怖いものなし（後書き）

やっぱ短いよな

フネ設定（前書き）

随時更新

フネ設定

・第二世代巡洋艦ビクトリー・・・全長６８．５メイル速力４１．７リーグ主砲１６サント砲×３０、１２サント砲×３０、６サント砲×３０

・第二．五世代戦艦ドレッドノート・・・全長１２１．３メイル速力４８．５リーグ主砲３０サント×１０、７．６サント砲×２６

・第三世代ペンシルバニア級戦艦・・・全長１８５．４メイル速力４９．５リーグ主砲３５．６サント砲×１２、１２．７サント砲×２２、７．６サント高角砲×４

・旧世代戦艦ロイヤルソヴリン・・・全長２０１．９メイル速力１８～２５リーグ主砲２３サント砲×４０、１８サント砲×６０

・第三世代グレートブリテン級戦艦・・・全長２６３．０メイル速力６０．９リーグ主砲４６サント砲×９、１５．５サント砲×１２、１２．７サント高角砲×２４、２，５サント機銃×１５０、艦載機シーファイア×７

・第三世代アドミラルグラーフシュペー・・・全長１８６メイル速力５３リーグ主砲２８サント砲×６、１５サント砲×１４、四サント対空砲×８、２サント対空砲×１０

鉄道と訓練（前書き）

短い・・・・

鉄道と訓練

鉄道と訓練

「陛下。ロンディニウム、バーミンガム、ロサイス間を機関車で結ぼうと考えているので陛下のお許しをいただきたいのですが」

そう上奏する男の名はフランシス・ハーモア・ハーフィールド、アルビオン工業の中心地を支える男である。

「その機関車とやらはどの程度使えるのか？」

「はい。今回採用する予定のロケット号型の機関車は一時間に４８リーグで客車を引くことができます」

「なんと！ペンシルバニア級に匹敵する速さではないか」

「はい。これが実用できれば流通が活性化するでしょう」

「分かった。通り道になる領主は私から説得しよう」

「ありがとうございます」

エリスｓｉｄｅ

そのころバーミンガムでは

「機関始動。ドレッドノート浮上します」

「機関出力八割で固定。これより本艦は王立空軍中央艦隊と合流しゲルマニア空軍と共に合同訓練を行なうため予定空域へ向かう」

「了解。機関出力固定。機関異常ありません」

「よし。三時方向へ転進せよ」

「了解。転進します」

最初はどうなるかと思いましたがいまでは皆立派なアルビオンの空の男の顔です。私も負けないように頑張らなければ。

「予定空域まで三十分の予定です。気を抜かないように」

「了解」
今回は周辺空族の対処に困ったトリスティンがもともと言い出したのだが、アルビオンがゲルマニアを誘ったことで話がこじれ始めなぜか言いだしっぺのトリスティンが不在という不可思議な状態になってしまったのだそうです。
「五時方向より艦隊接近。中央艦隊です」
「発行信号を送れ。こちらドレッドノートこれより合流するだ」
「了解」
「アリゾナより信号。歓迎するだそうです」
ペンシルバニア級は大きかった今このハルケギニアにこれより大きいフネはロイヤルソヴリンだけといわれているほどでそのロイヤルソヴリンも明日退役するそうです。

合同演習が始まると空賊は次々と沈められていきました。ペンシルバニア級の３５．６サント砲の威力の前には帆船など無力に等しい。しかしドレッドノートも３０サント砲を積んでいる。世界的に見れば化け物艦だ。空賊はすぐに鎮圧された。この二年間ともに成長してきたクルーたちは王立空軍の精鋭中央艦隊に劣らない錬度を見せてくれた。
「以上で合同訓練を終了する」
トリントン伯爵の声とともに解散となった。
「これよりバーミンガムへ帰還する」
「機関出力最大。転進します」
私たちはバーミンガムへと帰還した。

鉄道と訓練（後書き）

もう一度いおう。短い

空の女王（前書き）

短いけど連投ということで堪忍して

空の女王

空の女王

帰還するとお父様が待っていてそのままロンディニウムの中央艦隊のドッグに連れて行かれた。するとそこにはウェールズ王子と陛下とトリントン伯爵がいた。

「エリス・ハーフィールドだな？」

「はい」

「アルビオン王立空軍総司令官ウェールズ・テューダーの名においてこの場でアルビオン空軍少将及び、グレートブリテン級戦艦一番艦グレートブリテンの艦長に任命する」

えっ？いきなり少将とか言われても状況がうまく理解できない。けどそういえば昔お父様がそんな話してたなーとか思いながら了承する。

「エリス・ハーフィールド。若輩者ですが、此度の大任謹んでお受けいたします」

「では、案内しよう」

しばらく歩いて連れてこられた場所にはペンシルバニア級、いやロイヤルソヴリンすら小さく見える戦艦があった。

「これがこれから君の艦になるグレートブリテンだ。後の世まで空の女王として語り継がれるであろうアルビオン空軍最大の戦艦だ」

「空の・・・女王ですか？」

「極秘で行われた実験ではペンシルバニア級の３５．６サント弾を弾いて見せた。理論上では４０サントまで弾ける。そして世界最大の４６サント砲理論上４０リーグは飛ぶ。まさに不沈艦にしてアルビオンの空の守護神でもある」

その姿はまさに王者の貫禄を漂わせていた。無数の機銃に高角砲そして己の存在を誇示するような主砲そこで気になるものを見つけ

た。
「このなにもないスペースは何ですか？」
「そこには今スーパーマリンが開発している艦載機がのる」
「あの空飛ぶ鉄が載るんですか？」
「あ、言い忘れていたが一ヵ月後のラグドリアン湖の園遊会にこのグレートブリテンに出てもらう」
「りょ、了解しました」
その後一月間私と新しい仲間であるクルーたちの血の滲むような訓練の日々が始まるのである。

空の女王（後書き）

マジ短い

園遊会（前書き）

やっとネカフェにいく時間をつくれた

園遊会

園遊会

ラグドリアン湖の園遊会へ向かうためにグレートブリテンは準備を始めていた。

「こちら整備班武装の整備終了しました」

「機関室機関異常ありません。いつでも出航できます」

国王陛下、皇太子殿下ののる王室専用船グローリー号の護衛として派遣される。この一ヶ月の血のにじむような特訓でクルーたちはかつてのドレッドノートに劣らない錬度になっている。

「グローリー号より信号我発進準備整えり」

「返信しろ了解これより本艦が先行し貴艦を護衛する、だ」

「これより発進する。機関始動」

「了解。機関始動。順調です」

「機関出力七割で固定。グローリー号に船速をあわせろ」

「了解」

そして我々はラグドリアン湖へ向かった。

ラグドリアン湖

「まったくアルビオンも困ったものだ。成り上がりのゲルマニアと仲良くなどして」

一人のトリスティン貴族が言った。

「そうですな。始祖よりあたえられた王権をどう考えているのやら」

もう一人の貴族が答える。

「な、なんだ！あのフネは！！」

その時最初の貴族が空を見て驚愕した。

「どうした？」

「あれを、あれをみろ！」
「なんだあのフネは！ロイヤルソヴリンよりも大きいぞ」
そこにヴァリエール公爵が来ていった。
「アルビオンの国旗を掲げている。アルビオン空軍だ」

そのころツェルプストー辺境伯は
「あのような戦艦は前回の合同訓練では出てこなかったぞ。ということは新型か？」
「お父様。あのフネすごいですわね」
「よく見ておけ。あれがハルケギニア一の空軍、アルビオン王立空軍の精鋭中央艦隊のフネだ」

園遊会が始まり私も侯爵の娘ということで参加していた。ふと気がつくと殿下の姿が見えないので探しているとラグドリアン湖の辺まで来た。すると
「殿下。覗き見は感心致しません」
「うわっ！ミス・ハーフィールドこれはたまたま来たところにアンリエッタ王女がいただけで覗きをしようとしたわけでは」
「そうですわ。その辺で許してあげてはどうかしら」
「分かりました。アンリエッタ王女に免じ許しましょう。殿下以後このようなことはないよう」
お互い冗談なのは分かっているので三人で笑いながら会場へ戻っていった。

その頃アルビオン
ロンディニウム～バーミンガム間の鉄道が開通しようとしていた。
「今月は試運転。来月には本格開通できる」
「俺たちの苦労もやっと実るんですね」

「そしてバーミンガム鉄道会社がようやく日の目を見るということだ」

アルビオン陸軍工廠
「このタンクが完成すれば陸軍はより強力になる」
「アルビオンは空軍だけじゃないということだ」
「陸空そろってアルビオン軍はハルケギニアの抑止力になる」
「「「フフフッハーハッハッハーーー！！！」」」
陸軍の技術者はちょっとあれな子だった。

園遊会（後書き）

作者はかなりあれな子だった

モード大公とジェームス一世（前書き）

短いけど勘弁して

モード大公とジェームス一世

モード大公とジェームス一世

モード大公は突然国王ジェームス一世に呼ばれた。

「陛下。本日はどのようなご用件で？」

そういうモード大公に一瞬ジェームズ一世は鋭い視線をむけるといった。

「自分の胸に聞いてみろといいたいが、自分からは言い出さないだろうから言わせてもらう。お主の娘のことだ」

モード大公は驚愕した。彼の娘というのはエルフの女との間にできたハーフエルフなのだ。しかしばれているのならもう言い逃れはできない。少しでも良い方向に持っていかなければ

「もう気づいておいででしたか・・・。私はどうなってもかまわないが娘と領民は助けてやってくれないだろうか」

「モード。もとより罰するつもりもない、ここにお前を呼び出したのはお前の管理が甘いからだ。見事に情報局の諜報網に引っかかっておった。大公領だからウォルシンガムが直接調べたからこの程度で済んでいる。異端審問にでもかけられたらどうするつもりだ」

モード大公は呆気にとられた。てっきり取り潰しかと思っていたのに逆に心配すらされているのだ。

「罰はないのですか？」

「なんだ？罰してほしかったか？細かいこと一々気にしていたらバーミンガムとかにいる研究者とかの突拍子もないアイデアについて行けんのだ。まあお前の娘はちゃんと隠せるように情報局が手を打つ。もうそこそこな年であろう？そんな年頃の娘を隠すのはおぬしだけでは無理だろうからな」

「はぁ」

エルフとかのことって国王には細かいことなのか？と思うモードだった。

この会談のあとモード大公の娘ティファニアは森の中の小屋で暮らすことになり、その供にサウスゴータ家の娘マチルダが一緒に暮らすことになった。マチルダはその後一般人として国家機密クラスに関わるのはまずいので情報局の一員として働くことになった。

モード大公とジェームス一世（後書き）

これから原作読みます

魔法学院へ（前書き）

連投

魔法学院へ

魔法学院へ

十五歳になりスクウェアクラスの魔法を放てるようになった。そんなことに喜びをかみ締めていると。またまた突然陛下に呼び出しをくらった。

「エリス・ハーフィールドです。御用とは何でしょうか？」

「そう急ぐな。ウォルシンガム説明してやれ」

それにしてもこの国王老いをまったく感じさせない人である。ウェールズ国王の時代は果てしなく遠い・・・まあ問題ないけれど。

「エリス・ハーフィールド少将。あなたにはトリスティン魔法学園に入学してもらいます」

ふーん。魔法学院に・・・ってなんで！！

「ど、どういうことでしょうか？」

「今年の新入生がなかなか特殊でね。ヴァリエール家の三女はまあおかしくない。ツェルプストーの娘が入学するのは珍しいが事情がまえの学校で問題を起こし退学になったから、もっとも興味を引くのがガリアからの留学生タバサと偽名を名乗っているが髪の色はガリア王族の証ガリアの青、王族はジョゼフ、イザベラ、オルレアン公夫人とその娘。削除法で考え我々情報局が導いた結論は彼女はシャルロット・エレーヌ・ド・オルレアン。ジョゼフ王の弟シャルルの遺児だ。ここまで人材が揃って何も起こらないはずがない。年代もちょうど良く実力十分ということで君に白羽の矢がたったんだ。任務のついでに学校に通える便利な仕事だ。まぁ手続きは済んでいるが」

逃げ道ないじゃん・・・・

「グレートブリテンは！私の艦はどうなるのです？まさか！私は艦長クビ！！！」

「はやとちりするでない」

陛下の声で冷静になる。深呼吸深呼吸。
「落ちついたか？フネのほうは副艦長が艦長代理になり、有事のときはおぬしが戻って指揮を執る。わかったか？」
「了解しました」
その後必要な荷物をまとめトリスティンへと私は向かった。

円卓の騎士（前書き）

遅くなりました

円卓の騎士

円卓の騎士

これはエリスがグレートブリテン艦長になってからトリスティン魔法学院に行くまでの間のお話。

昔々のそのまた昔始祖プリミルもまだ生まれぬ頃未だアルビオンがブリテンと呼ばれその大地は地上にありました。そこで人々は共に暮らし笑いあって暮らしていた。そんなあるとき突然地は裂けハルケギニアの上空へ高く高く飛び立ってしまいました。空へ浮かび上がった土地にはあまりに人が居すぎ土地が足りなかったのです。人が争いを始めるのは必然でした。ヴェリヌス率いる新王朝派とアーサー王率いる正統王朝派に二分された大内乱になった。アーサー王は自ら剣をとり常に先陣をきって大ブリテンを統一するまで戦い続けた。そんな王とともに戦った百五十人の優秀な騎士たちがいた。彼らは円卓に選ばれその名を刻まれたものたちだった。彼らを人々は円卓の騎士と呼んだ。その伝統は今でも続き、円卓の騎士達は今もアルビオン王国を支えている。

そんな円卓の騎士に選ばれた優秀な人物にも等しく訪れるものがある。それは・・・死である。一人の老騎士が屋敷の一室に横たわっていた。

「ジョーンズ卿。しっかりしてください！」

「そう騒ぐな。自分の体は自分が一番良く分かっている。思い返

せばもう五十年も前になるか・・・二十三のときに円卓に選ばれたと屋敷に早馬がきたのはとても驚いた。早いものだ、アルビオンは大きく変わった。今ではどの国にも負けない国力があるだろう。五十年前にはとてもじゃないが考えられない光景だ。平民と手を取り合い貴族が生きていく光景、誰もが夢に見ていた。私はこのアルビオンを誇りある円卓の騎士として見守ることができたこと嬉しく思う。アルビオンの民が、貴族が豊かになった今も向上心を忘れないことを誇りに思う。天寿を全うし次の世代にこの国を托せることを・・・」

「ジョーンズ卿・・・お逝きになられましたか」

半世紀アルビオンを見守り続けた老騎士は安心したような満足げな微笑みを浮かべながら息を引き取った。そしてこの日円卓からジョーンズの名は消え、新たな名が刻まれた。

バーミンガム　ハーフィールド侯爵家

ある日ハーフィールド家に早馬が来た。そしてその通達が読み上げられた。

「本日円卓の騎士ジョーンズ卿がお亡くなりになられ円卓が新しい騎士としてハーフィールド侯爵家の長女エリス・ハーフィールド少将を選び、此度円卓への召集が下りました」

「私が、円卓の騎士に？」

「はい。円卓の決定ですので拒否権はありません」

「勿論です。光栄です」

「ではお待ちしております」

円卓が選ぶというのは文字通り円卓そのものが自動的に死亡した騎士の名を消したり、新たな騎士の名をその身に刻むのである。その決定は決して覆すことはできず、貴族、平民問わず円卓の騎士に相応しいものを自動で選定しているとされている。

円卓に向かうとそこには残りの騎士たちとジェームス一世がいた。

「ここに、この者エリス・ハーフィールドを新たな円卓の騎士に任ずる」

そして王から直々に長さ1メイルの刀身に模様のようにルーン文字が刻まれた剣を授けられ、円卓の騎士たちが身に着けている裏地にこれもまたルーン文字の刻まれ、胸、下腹部などの要所にのみ金属を使った鎧（女用）を身につけ円卓についた。そして騎士達は声を揃え誓いを立てる。

『我ら円卓に選ばれし騎士は
この手に持ちし剣に誓い
この身、魂尽きるまで
大ブリテンの安寧のために』

円卓の騎士（後書き）

次回から原作かな？

学園一年目舞踏会　微熱と騎士（前書き）

時間が空きすぎてしまった申し訳ない内容も・・・申し訳ない

学園一年目舞踏会　微熱と騎士

学園一年目舞踏会　微熱と騎士

トリスティン魔法学校に入学してしばらくするとどうやらグループのようなものができたようだ。当初は公爵家の娘であるルイズを中心としたものが大きかったが彼女が魔法を失敗（爆発を失敗というならだが）してましてやコモンマジックもできないとわかるやいなや手のひらを返したように彼女から離れていった。私はもともとどこにも所属していなかったので関係ないが。そういえばあのタバサとツェルプストーもどこにも所属していなかったというよりも私たちが浮いていたというのが正しいかもしれない。そんな時舞踏会で事件が起こった。突如風が吹いてツェルプストーのドレスを吹き飛ばしたのだ。そして犯人探しとなったのだが・・・・

「あそこにいるミス・タバサではないかな？」

と言っているこの男は風メイジのヴィリエ。要するにこいつが犯人なのだがタバサの実力が事前の情報どおりトライアングルならすぐにばれるだろうから面倒なのでかかわらないでおくことにしたかったのだが、あの魔法が使われたときタバサはハシバミ草のサラダにがっついていたので明らかに違うことを怪しまれて苦し紛れにこの男はあきれたことを言い出した。

「だったら彼女かもしれない。ミス・ハーフィールドはミス・タバサの後ろにいたし彼女も風メイジだからね」

「怪しいけれどそれは確かめればいいことね。ミス・ハーフィールド、あなたが犯人か確かめるために勝負させてもらうわ。立会人はタバサあなたにお願いできるかしら？あなたも少しは今回の件で迷惑したでしょう？」

「別に」

「あー。もう、いいわ。とりあえず立会人頼むわよ」

「分かった」
しかしどうしてこうなった。ヴィリエはあとで確保しておこう。ツェルプストーは火のトライアングルだから一発魔法を相殺すれば分かってくれるだろう。

舞踏会も終わり翌日ヴェストリの広場にいた。
「さあ、はじめましょう？」
「無論です。タバサさんお願いします」
「始め」
タバサの一言とともに二人とも動き出した。
「ファイアボール！」
それを私は、
「エアハンマー」
「やっぱりあなたじゃないようね、エリス」
「どうしたんだツェルプストー急にファーストネームで呼ぶなんて」
「認めたってことよ。それよりヴィリエのやつを探しにいきましょうあいつが犯人よね？」
「探す必要はないよツェルプストー。そこの茂みに隠れていたから先に気絶させておいたから」
「準備がいいわね。あと私のことはキュルケでいいわ」
「わかったよキュルケ。それじゃあこいつを懲らしめるとしますか？」
「賛成」
「あら？タバサも？」
タバサが杖を構えていた。その後ヴィリエの身に何があったかはあえて語るまい。
ただひとことといっておくとすれば次の日に全裸でこんがりローストされた女性恐怖症になった風メイジがいたことだけだ。

学園一年目舞踏会　微熱と騎士（後書き）

テストが返却された。理数系が壊滅・・・・だれかたすけて

名医（前書き）

主人公出てきません
また、ありえない設定で書いてしまった！！手術の場面は適当です。
突っ込みはなしでお願いします。
この物語の技術面を指摘されたのだが、作者にはそこまで説明する
ことも書き直す力もないのでこのままで勘弁していただきたい。

名医

名医

ヴァリエール公爵は悩んでいた。彼には三人の娘のことで悩みがあったが、今悩んでいるのは上のほうの娘カトレアのことだった。彼女は体が弱くそのために嫁にもらってくれる家が公爵家の娘にもかかわらずいないのだ。いわゆる嫁き遅れである。娘の体のことを常々気にかけていた公爵は水メイジを呼んだり秘薬を買ったりと少なくないお金をかけてきたが回復の兆しが見えない。そこにある噂が舞い込んできた。アルビオンに優秀な医者がいるということだ。メイジではないということが気がかりだったが藁にも縋るおもいでその医者を呼ぶように使いを出したが返事は驚くべきものだった

「わざわざ使いまでよこしていただき恐縮なのですが、私は今自分の診療所をもっておりそこを離れることができないのです。大変申し訳ございません。

ロンディニウム診療所所長　ジョン・ハンター」

「なんて無礼な！」

「よせ、カリーヌ。私はカトレアを連れてアルビオンへ行ってくるその間留守は頼んだぞ」

「・・・分かりました」

そして公爵はアルビオンへ旅立った。

「ここがロンディニウム診療所か・・・。カトレア、体は大丈夫か？」

「ええ、お父様」

中に入ると待合室には患者がたくさん待っていた。

「こんなに待つのか・・・」
「しょうがないですわお父様。それだけ腕のいいお医者様だという証拠ですもの」
「そうだな」
それから二時間ほど待つと
「お次の方どうぞ」
カトレアの順番が来た。
「手紙を出したものだ。どうか娘を治してやってもらえないか」
「分かりました。わざわざご足労いただいたのですからできる限りのことをしましょう。まずは症状を聞かせてもらえますか」
公爵はカトレアの病状をすべて詳細に説明した。
「その症状から推察される病気だとしたら魔法での治療は場しのぎにしかならなかったのもうなずけますな」
「どういうことだ？」
「おそらく魔法過敏反応型悪性腫瘍と我々が呼んでいるもので間違いないでしょう」
「魔法過敏反応？それで秘薬も魔法も効かなかったのか」
「はい。その通りです。平民にできているのが見つかったのが２５年前そのとき魔法で治療しようとした平民メイジの医者が腫瘍が魔法使用後に肥大化しているのに気づき学会に報告したのです。めったなことでは死に至らないのでそこまで恐ろしい病気とは平民には思えないのですが、メイジにできると話が違う。魔法を使えば腫瘍が大きくなり、秘薬を使っても治らないで悪化する。治療方法は腫瘍の切除しかありません」
「傷跡がのこるのか？」
しょうがないことだが可愛い娘の体に傷が残るのは忍びないと公爵は考えた。
「なるべく目立たないように致しますが、まずは腫瘍の位置を確認させていただいてよろしいですか？」
「ハンター殿が行なうのか？」

「いえいえ。ちゃんと女性には女性の助手が当たるようにしております」
助手は触診を開始した。次第に顔が険しくなってくる。
「先生、この腫瘍は心臓の真下に5サントほどのものができていると思われます」
「公爵殿。此度の手術は長丁場になりそうです。我々も準備がありますのでお嬢様はしっかり休まれて万全の状態で望んでいただきたい」
「分かった。明日また伺う。よろしくお願いする」
公爵は深々と頭を下げた。
「公爵様に其処までされたら、いや、一人の親に其処までされたら完璧な手術をするしかないでしょう。しかしこれだけは覚えて置いていただきたい、医者は始祖でも神でもなんでもない、人なのです。全知全能じゃない」
「それはもしものときの言い訳か？」
公爵は顔を怒りに染め上げていった。
「いいえ。だからこそ私は目の前の一人の患者を救うのに全力を注ぐのです。それが私の、いいえ、この診療所の職員全員の誇りです。明日の手術必ず成功させましょう」
「ああ。もちろんだ！祈ることしかできないが、君たちに娘の命をたくそう」
ハンターと公爵は固く握手をかわした。

翌日手術の時間がやってきた。
「それでは、手術を始めます。麻酔は？」
「効いています。しかしこの腫瘍は厄介ですね先生」
「そうだな。魔法を使えたらもう少しやりやすいがそれで悪化させては元も子もないからな」
「準備整いました」
「これより腫瘍の摘出手術を始める。患者の体力を考えて二時間

以内には終わらせたい。全員ついて来い。メス」
「はい」
流れるような手つきで切開を始めるハンター助手との息はぴったりでまるで芸術のようだった。
「これは、すごい・・・」
外のガラス越しに見ていた公爵はその手際のよさに感動していた。
しかし手術開始から十分ほどしたとき切開して腫瘍を確認したハンターは目を疑った。
「心臓に・・・癒着している！？」
しかも腫瘍は当初の予想を上回る7サントだった。
「手術を続ける。超低体温手術に移行する」
「先生！それは！」
「かまわん！これしか時間内に終える方法はない！」
助手が止めるのも無理はなかった。この手術方法はかつて異世界から来たという医者が教えてくれた方法で未だハンターも実際の手術で使用する機会がなかったのだ。
「責任は私が取る。必ず患者は救う。そのための最善の手段にかけてみたい」
ハルケギニア初の超低体温手術が始まった。
「どうしたんだ！カトレアを冷やし始めたぞ！」
「落ち着いてください！」
「あれも手術の一環です！」
外では暴れる公爵を抑えるのが大変だった。
「よし。慎重に腫瘍を切除していくぞ」
ここまでの所要時間一時間。あと半分でタイムリミット。
「腫瘍の切除完了。縫合終了。体温を戻すぞ」
「了解です」
二時間以内での手術は成功した。あとは
「戻ってきなさい。あなたの家族が待つここへ」
「心音確認体温正常まで戻りました」

史上初の試みは最高の形で終了した。

「手術は成功です公爵殿」
「ありがとう！本当に・・・」
「あとは術後の経過をみるだけです。心配ないと思いますが、一週間ほどは入院していただくことになるかもしれません」
「分かった。さすがにそこまであけるのは問題なので妻を呼ぼう」
「目が覚めるまで付き添ってあげていてください。家族がいたら安心するでしょうから」
「分かった」

こうしてアルビオンの名医は「奇跡を呼ぶ手を持つ男」としてトリスティンで物語になるほどの有名人になるのはまた別のお話である。

名医（後書き）

開き直ってこのまま続けてみる

使い魔召喚（前書き）

設定がぶっとんでるのはいつものこと・・・

使い魔召喚

使い魔召喚

あれから暫くたって進級のかかった使い魔召喚の儀の日がやってきた。それまでとくに大きなことは・・・あったか？あったとすればヴァリエールが実家から帰ってくるように使いがきて青ざめて半狂乱になりながら出て行ったのがしばらくして帰ってくると大層ご機嫌で鼻歌まで歌いあろうことかゼロと馬鹿にされても笑顔で許していたことだろう。その光景をみた生徒は馬鹿にしたりしすぎて狂ったかと思いビクビクしていたが暫くすると元に戻っていて安心したという謎な出来事ぐらいだった。

「ねぇ。キュルケ、ヴァリエールの奴がちがちじゃないか？」

「大丈夫よ。まぁ、ちょっとからかってこようかしら」

「程々にしときなよ。まったく素直じゃないな」

「同感」

「なによ、二人して！」

その後遠くからヴァリエールの怒鳴り声とキュルケの高笑いが聞こえた。

そして使い魔召喚の儀式の時間がやってきた。

「ミス・ハーフィールド。前へ」

「はい」

まずは私の番だ。横にいたキュルケが声をかけてきた。

「あなたのことだから心配はしてないけど肩の力抜いてリラックスしていきなさい」

「そんなに緊張してたかな？」

思わず苦笑いを浮かべる。

「えぇそれは、とっても」
「いってきます」
キュルケに背中を押されて広場の真ん中までくる。
「それでは始めてください」
コルベール先生に促されゆっくりと自分だけの思いを乗せた自分だけの呪文を唱える。
「わが名はエリス・ハーフィールド。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従い、共に生き、牙を揮い、騎士の誇りを貫き通す使い魔（戦友）をここに誘え」
元の呪文など全く気にしないで紡いだ呪文は確かに成功していた。目の前の視界一杯を埋め尽くす巨体・・・
「すこし・・・大きすぎやしないか？」
「すごい使い魔を召喚しましたねミス。それではコントラクトサーヴァントを」
「は・・はい」
余りに巨大な竜だったため少し苦労したが無事契約を成功した。
「あなたの名前は・・・ティアでいいか？」
［ええ、わが戦友よ］
どうやら雌らしい。
［ルーンの効果か？］
［そのようです。あなたに流れるかの騎士王の血の香りに惹かれ参上しました］
騎士王？アーサー王か？たしかにアルビオンの古株の貴族の家系には私の家も含めペンドラゴンの血をひくことを自称するのが多いがまさか本当にそのようなことがあるのか？
［私にかの王の血が流れていると？］
［長きときを経ているのですから濃いか薄いかは別としてかの地の民はその多くが王の末裔です。その血があなたは私の許に届くほどのものであったということです］
［そういうものなのか］

と一応納得してみる。キュルケはサラマンダー、タバサは風竜の幼生を召喚したらしい。
「この子フレイムっていうのよきっと火竜山脈産のに違いないわ！」
「この子はシルフィード」
「きゅるーー！」
「こいつの名前はティアだ」
すると後ろで爆発が起こった。
「ヴァリエールか？」
「そう」
「まったく・・・サモンサーヴァントまで爆発させてどうするのよ」
「後一回、後一回だけです。ミス・ヴァリエール」
そうコルベールが言いルイズはもう一度サモンサーヴァントを始めた。
「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。宇宙の中のどこかにいる私の使い魔よ。神聖で美しく強力な使い魔よ。私は心から求め訴えるわ。我が導きに答えなさい！！！」
一際大きな爆発が起こり煙が晴れると
「これが・・・平民が神聖で？美しく？強力な・・・使い魔？」
私たち三人は
「「「さぁ？」」」
と言うことしかできなかった。なぜなら、
そうつぶやくヴァリエールの目の前には不思議な格好の少年がいたのだ。

使い魔召喚（後書き）

私は何がしたいんだ？文章書きながらその話の着地点探すとか

しかも基本不時着ｗｗ

使い魔は人間（前書き）

今回は原作主人公の少年視点の回です

使い魔は人間

使い魔は人間

サイトｓｉｄｅ

「ここはどこなんだ？」

俺は確かパソコンを修理が終わったって連絡があったから取りに行って、この前登録した出会い系のメールを確認しようと思って帰っていたらそこに銀色の鏡が・・・でこの妙な格好をした連中は何なんだ？そうか！拉致か！早く家にかえらねえと。

「俺を早く家に帰せ！！」

しかし目の前のピンクの髪の少女は怒鳴り返してきた。逆ギレか逆ギレなのか？しかし少女はこっちを指差しながら禿頭のこの集団をまとめているおっさんに向かって何か言っている。そして急にこっちをむいて何か捲くし立てると顔を近づけてきて・・・・へ？

「キ、キスぅ？痛い痛いイタイイタイ！！！！！」

「ルーンが刻まれているだけだから。落ち着きなさいよ！！すぐ終わるから！」

「俺の体に何した！ていうか言葉通じるじゃねえか！！」

痛みが引くとあのおっさんが近づいてきて俺の手を確認して

「これは珍しいルーンですね」

とかいって必死に写していた。

「それよりここどこだよ。早く日本に帰してくれ」

「ニホン？なにそれどこの田舎よ？」

「なにを言ってるんだよ！日本をしらねぇのか！それに日本はこんな田舎じゃねえ」

「なにを訳わからないこと言ってるのよ。それに平民の癖に貴族になんて口の利き方をしているの！！」

「なんだよ！貴族？時代錯誤もいい加減にしろよ！」
「使い魔召喚の儀はこれで終了です。すぐに戻りなさい」
そうあのおっさんが言うと周りのやつらが
「飛んだ！？ワイヤーは吊り上げるクレーンはどこだ？」
「何言ってるのあれが魔法よ。平民だから見たことないのかもしれないけど」
本当に訳がわからねえそうだこれは夢だ。
「思いっきりぶん殴ってくれ。そうすれば夢から醒めていつも通りの日々が始まるはずだ」
「いいのね」
「おうよ！！」
どっかから「被虐趣味？」とかいう聞き捨てならない単語が聞こえたが夢から醒めれば関係ねぇ！
「ちぃ姉さまが元気になって気分がいいときに、どんな使い魔が来るか怖いけどほんの少し、すこーーーしだけ期待してたのに！なんで神聖な儀式で召喚されるのが平民なのよーーーーーーー！！！！！」
ゴスッ！！
お前の右・・・世界を狙えるぜ・・・
覚えているのはそこまでだった。

使い魔は人間（後書き）

次回からはいつも通りの語り口にもどります？

番外編（ネタ）　ついてないワルドさん（前書き）

わけの分からない上に本編とはちっとも関係ないので読まなくても大丈夫な話です

番外編（ネタ）　ついてないワルドさん

番外編（ネタ）　ついてないワルドさん

ついてない本当についてない。

これは某王国のグリフォン隊隊長の口癖である。そんな彼のついてない日々に密着をしてみよう。

噂のついてない男ワルド子爵の朝は早い。朝起きて無事に着替えを終えて安堵のため息をつく。この数年一週間に三度以上はタンスの角に足の小指をぶつけるのだ。

どんなに警戒していても打つときは打つ。今年のワルドの目標はこの週三回の記録を破り二回以下にすること、聖地なんて二の次である。

この男の不幸はこの程度ではない。街中を歩いていて鳥の糞が頭に乗った一日の最高記録なんと五回。そして通りを歩いていた子供につけられたあ

だ名は「鳥の糞」どこ

ぞの枢機卿の親戚かと内心突っ込みをいれながらもワルドは怒らない。笑顔で対応する。

なぜなら彼は紳士だからである。故に彼の怒りは隊員の訓練のときに発散される。

大事なことなのでもう一度言おう。彼は紳士である。婚約者があのピンクの娘なのも彼が

紳士だからである。

そしてこの男の一日は部下の不始末の尻拭いや机の上に積まれた身に覚えのない始末書で

終わるのである。

そんな彼にも誇るべき業績がある

違法奴隷商摘発件数通算２３９件

ちなみに開放した少女や幼女の数５４１人

そう彼は立派な魔法使い（紳士）なのです。

だから今日も彼は日常の不幸に負けず戦い続けるのです。

番外編（ネタ）　ついてないワルドさん（後書き）

次は本編書こう

決闘前（前書き）

このまま決闘までかくのがしんどかったので勘弁

決闘前

決闘前

驚くべきことが起こった。・・・これだけでは何がどうしたのかまったくわからないだろうが説明をするとその原因は実にくだらない。食事をお仕置きと称して抜かれていたヴァリエールの使い魔がなぜか食堂の配膳を手伝っているという珍しい光景を見ていると、グラモンのポケットから壜が落ちたのだ。それをたまたまシエスタというメイドが拾ったのが事の発端だった。

「貴族様。これをお落としになられました」

そういってグラモンに渡そうとした。しかしグラモンは

「なにを言っているんだね。僕のものではないよ」

そういってシエスタを下がらせたが時すでに遅く。

「おい、ギーシュはモンモランシーと付き合ってたのか！あれはモンモランシーが自分に特別に調合してる香水だぜ！」

とよく名前も覚えていない男子がはやし立てると

「なにを言ってるんだい君、薔薇はぶべらっ！！！」

なにか言おうとしたギーシュの頬を張り手で一年のケティという少女がはたいた。

「私とは遊びだったんですね！ギーシュ様！！」

「いや・・これは・・冷たっ！！！！」

またもや言い訳をしようとしたギーシュの頭にワインがかけられた。かけたのはもちろん・・・

「ギーシュ・・・最低！！！！」

そうモンモランシーである。

「待ってくれモンモランシー！！これには、ぶべら！！！」

問答無用でビンタをくらって倒れこんだ。

「待ってくれーーーー！！！！！」

「メイド君。君のせいで二人のレディの心に傷がついたじゃないか！！」
そうギーシュが言いがかりをつけ始めたときだった。
「お前が二股かけたのが原因だろうが、そんなこともわからねぇなんて貴族ってのはどうしようもねぇな！！」
ヴァリエールの使い魔がそういうとギーシュは
「君は礼儀がなっていないようだね。所詮ゼロの使い魔ということか。だが僕にも面子というものがある」
そういうとグラモンは一旦間をあけて言い放った。
「諸君。決闘だ！！！」

決闘前（後書き）

なんか体がだるい

決闘使い魔の実力（前書き）

難産でした・・・
あまりできもよくない

決闘使い魔の実力

決闘使い魔の実力

ヴェストリの広場では生徒たちが集まっていた。その中心にいるのはグラモンとヴァリエールの使い魔の少年だった。

「降参するなら今のうちだぞ少年」

そうグラモンが促すが

「ふざけんなよ。この二股貴族様（笑）がよ！！！」

そう少年は挑発する。しかし素手でいってはどのようなメイジにも普通の人間は勝てないだろう。

「ふざけた口を！！いいだろう・・・決闘を開始する！！」

そして決闘は始まった。最初から誰もがこうなると分かっていた。少年はグラモンの作り出したゴーレム、ワルキューレの拳を受けて血まみれで顔も青く腫れ上がっていた。

「もう降参したらどうだね」

やった側だがグラモンもさすがに心配している。するとそこにヴァリエールがやってきた。

「何勝手なことをしてるの！！」

「なんだよ。これは俺の喧嘩だ。関係ねぇだろ」

「はやく、ギーシュに謝りなさい！」

そうヴァリエールが言うと、グラモンも

「そうだよ、使い魔君。頭を下げて謝ってくれればいい。それだけでなかったことにしようじゃないか」

しかしヴァリエールの使い魔は

「やだね」

「な、なんでよ！！」

ヴァリエールが問いただす、

「下着だってな、洗ってやる。ベッドが藁でも文句はいわねぇ。

でもなぁ・・・」

「下げたくなくない頭は下げられねぇ！！！」

そういうともう一度立ち上がった。

「そうか・・・ならこの剣を使うがいい。平民がメイジに対抗するために産み出した牙だ。だが、それを抜けば対等の立場。僕も手加減はできなくなる」

「もうやめて！サイト！剣なんて抜かなくていいわ！！早く頭を下げて！」

「へへっ！やっと名前で呼んでくれたじゃねぇか・・・だけど俺は一歩もひかねぇ！！！」

剣を抜いた使い魔を止めようとするヴァリエールを私とキュルケで引き止める。

「放しなさいよ！ハーフィールド！ツェルプストー！！」

「放せない。あれは彼の自分の尊厳を賭けた戦いだから。君は止めちゃいけない」

「自分の使い魔ぐらい信じてあげなさいよ」

「そんなこと言っても・・・・」

しかしそこからの戦いは誰も想像していない結果になった。

「ねぇ・・エリス。剣を持っただけであんなに強くなる？」

そうキュルケが尋ねてきた。

「普通はありえない。ただ確かに剣を見事に使いこなしていたけど、型も何もかもめちゃくちゃで素人が剣を最も剣に負担の少ないコースで振った矛盾した感じがある」

「わけがわからないわね・・」

そしてこの決闘は・・・・

「終わりだこの薔薇野郎・・・・・」

「ぼくの・・・負けだ」

ヴァリエールの使い魔の勝利で終わった。

虚無の曜日　　サイドエリス

虚無の曜日　　サイドエリス

決闘騒ぎがあったあとの虚無の曜日。私はトリスタニアに足を伸ばしていた。そして裏路地にある酒場へ向かっていた。知人との待ち合わせのためだ。

「マスター。タルブのワインは入ってる？」

「こんなところに貴族のお嬢さんが来るなんて珍しいじゃねぇか。あぁ。タルブ産か？六年前の奴がまだ五本くらい寝かせてあるんだが飲むかい？」

「六年前はここ二十年で最高の出来だったから中々手に入らなかったんだよ。よく手に入れられたね。あ、でも連れが来るまで開けるのは待ってくれないか？」

「あいよ」

それから三十分ほどすると扉が開いて知人が入ってきた。

「エリス。すまないな。待たせてしまったようだ」

「いやいや。忙しいのは知ってるからこのくらい待ったうちに入らないさ。マスターが良いワインを出してくれたから開けようじゃないか、アニエス」

「タルブ産の六年前のがまだ残ってたのか・・・。しかし私はそんなに持ち合わせていないのだが」

「ここは私持ちだよ。心配しないで飲め」

トリスティン銃士隊の隊長のアニエスと知り合ったのは三年前のことだった。トリスティン銃士隊はマザリーニ枢機卿の進言によりア

ンリエッタ王女の命令でアルビオンへ期間限定で合同訓練へ向かっていた。そして彼女たちの訓練の相手として選ばれたのが円卓の騎士団だった。理由は魔法主体の戦闘と剣を使う戦闘の両方に精通している部隊は彼らぐらいであり、王立陸軍から部隊を引っ張ってくるより王直属のほうが動かしやすかったからである。また一番若手であったし唯一の女性騎士であったエリスが中心になって訓練にあたり魔法なしの模擬戦を行ったりしながら、アニエスとは特に好敵手として仲良くなっていった。そして今でもこうして飲みに行ったりする仲である。

「エリス。最近トリスタニアで違法薬物の販売が急増しているのだが、そっちで何か掴んでないか？」
「今のところは特にそのような報告も聞いたことはないけれど・・・少し情報を集めてもらうことにするよ」
「すまないな・・・」
「何。気にしない気にしない。私とアニエスの仲だ。さあ今日は飲め！！」

そんなことを言ったのは良かったもののその後酔いつぶれたアニエスを銃士隊の宿舎に運ばなければいけなくなった。
ちなみに今日の出費は１４２エキュー５０スゥだった・・・・・

虚無の曜日　　サイドエリス（後書き）

もう受験生なのよね・・・・

宝物庫襲撃事件前編（前書き）

ノリで書いてるとよく展開にこまることがある・・・

宝物庫襲撃事件前編

宝物庫襲撃事件前編

アニエスを送って帰った次の日の朝なにやら起こっているようなので急いで学園から出て行こうとするマチルダを呼び止めた。
「なに急いでるの？」
「ん？なんだいあんたか。宝物庫の壁に穴があけられて盗まれたんだとさ。それで一足先に聞き込みに言いってくるのさ」
「そうか。呼び止めてごめん。私も後から探しに行くよ」
「ああ。頼むね」
そういうとマチルダは学園から出て行った。

一方そのころ学園長室では
「ではゴーレムに乗った男が破壊の杖を盗んでいったのかね」
「はい。この目でしっかり見ました。オールドオスマン」
「私たちもです」
そこには、キュルケ、タバサ、ルイズ、オスマン、そしてコルベールをはじめとした教師たちがそろっていたが
「こんなときにミス・ロングビルはどこにいっとるんじゃ」
「犯人を捜索するのが今は先でしょうオールドオスマン」
コルベールがオスマンに進言した。
「うむ。そうじゃな。では捜索隊に名乗りを上げるものはおらんか？」
しかし、誰も手を上げなかった。
「なんじゃ！！学園の教師はただの腰抜けどもだったのか！！！」

オールドオスマンが怒りをあらわにしていると、
「私行きます！！」
ルイズが手を上げた。それにつられてタバサとキュルケも手を上げた・。するとキュルケが
「あと一人助っ人を呼んでもよろしいですか？」
「うむ。許可しよう。呼んできなさい」
オスマンが許可をするとキュルケは部屋を後にした。

マチルダと別れてから少し腹ごしらえをしてから後を追おうと考えていると、部屋の扉にアンロックをかけてキュルケが突撃してきた。
「エリスお願い！これから宝物庫の襲撃の犯人を捜しに行くんだけどついてきてくれない？」
「なんで生徒の私たちが行くんだ？」
「教師たちが誰も手を上げなくてね。ルイズったら私が行くってきかないから私とタバサもついていくことにしたの」
「はぁ・・・まあいいよ。ついていこう」
「ありがとう！」
そしてオールドオスマンのもとにつれてこられた。
「ミス・ハーフィールド。ご協力感謝する」
「しかし、ミス・ロングビルが周辺に聞き込みに行っているので報告があってからでもよかったのでは？」
「む？道理でいないはずじゃと思ったらそういうことじゃったのか」
「はぁ。報告せずに行動していたのですか」
「そのようじゃな。ついでにミス・ロングビル無事を確認、回収してきてくれんか？」

「分かりました」
あいつに限って泥棒風情に殺されはしないだろうと思いながら私はキュルケ達と学園をあとにした。

宝物庫襲撃事件　中編（前書き）

疲れたので前後ではなく前中後にわけることにしやしたのでみじかいっす

宝物庫襲撃事件　中編

宝物庫襲撃事件　中編

まずは行方不明になっているマチルダ、ここではミス・ロングビルだが、を探すために周辺の村に聞き込みをはじめることになった。

「しかし、馬車で聞き込みなんてしてたら日が暮れちまうよ」

ヴぁリエールの使い魔が文句をいうが、

「うるさいわね！しょうがないでしょ、いきなり空から降りてきてものを尋ねても怯えられてまともにはなしてなんてもらえないわよ。頭をつかいなさい、バカ犬！！」

「そこまで言うことねぇじゃんか・・・・」

確かに彼の言うことも一理あるそこで

［ティア。そっちのほうはどうだ］

［まだ見つかりません。引き続き探してみます］

［よろしく］

ティアが上空から捜索をしている。ティアは先住魔法で自分の体を見えなくすることができるそうで時間の節約のために空からの捜索を頼んでいる。

一方地上での聞き込みはあまり進んでいなかった。

「ここも空振りね」

「まったく手がかりなしかーーー」

使い魔、主人ともに疲れてきている様子だった。

「一体いつまでこんなこと続けなきゃいけないんだ・・・」

「文句言わない！！」

やる気はどうやら主人のほうがあるようだが、

そんなこんなで彼此二時間近く聞き込みを続けた結果

「それでしたら怪しいフードの男が女性を連れて森のほうに行きました」

「そう！分かったわ。向こうの森ね、礼を言うわ」
「いえ、そんな恐れ多いことで」
ん？この農民・・・そうか情報局員か。目線で問いただしてみると左足で二回地面をこすった、肯定の合図だ。ということはここを通ったのは間違いない。
［しかし、罠のような気がするがティア、森のほうに絞って探してくれ］
［分かりました］
地上のほうも森のほうに向かうことになった。しかしどうも嫌な予感がする。警戒しておくに越したことはないだろう。そう考えながら馬車の揺れに身を任せた。

宝物庫襲撃事件　後編（前書き）

ぐだぐだやっぱり筆がのらんとです

宝物庫襲撃事件　後編

宝物庫襲撃事件　後編

マチルダｓｉｄｅ

ったく、魔法をつかってこいつをぶっ飛ばして破壊の杖を持って帰るってわけにはいかないのかね。まあ、相手の面子を考えてなるべく功績をあげないようにっていわれてから来てるからしょうがないんだけどね・・・

「ハァ～」

「何をため息なんかついていやがる！！お前は自分の立場がわかってるのか！！」

「はい！わかっております！！」

まったく自分の立場がわかってないのはこいつだよ私のことを平民だと思ってるのか杖を持ってるか探しもしなかった。だからいつでもこいつを串刺しにできる。今は我慢するしかないけど・・・・・

誰か早く助けに来てくれないかね。

そのころ地上では森の中に小屋を見つけていた。

「あの小屋なんか怪しいわね」

確かに怪しい妙に古ぼけた風になっている。

［ティア、何かここら辺で怪しいやつはいたか］

［はい、おそらく目標の破壊の杖はあの小屋の中に保管されています。また、犯人とおぼしき人物とマチルダさんは森の中にいるよ

うです」
「ありがとう」
となると私たちが小屋を探索している隙に襲撃といったところか、偏在を二体つくり
「私があの小屋に偵察に行こう。みんなは外を見張ってくれ」
「わかったわよ」
「わかった」
「わかったわ」
賛成をいただけたようなので偏在を一体小屋に向かわせた。もちろん誰にも気づかれないように。
偏在が小屋に入り破壊の杖を確保したことを確認したとき十メイルほどのゴーレムが小屋に襲い掛かった。小屋が踏み潰される寸前に偏在にタバサへ破壊の杖を投げ渡した。
「エリス！！」
「ちょっと！ハーフィールドがまだ中にいたのに！！！」
キュルケとヴァリエールが叫び使い魔の少年も何があったのか理解できない様子で混乱していたがタバサは冷静だった。これはばれてるかな？
「こっちにくる！！」
そう警告してタバサはエアハンマーを唱えてゴーレムにたたきつけた。しかしゴーレムは壊れた部分を修復して向かってきた。
「撤退」
いったん引くことが得策と判断したタバサはシルフィードをよんで逃げようとしたがヴァリエールが
「私は貴族よ。貴族とは魔法を使える者をそう呼ぶんじゃないわ。敵に後ろを見せず、己の誇りと名誉を最後まで守り抜ける者をそう呼ぶのよ！！」
といってゴーレムに向かってファイアーボールを唱えるが爆発が起こるのみで崩れても再生するゴーレム相手には意味がなかった。
「ルイズ！早くこっちに！！」

キュルケが叫んだがゴーレムはヴァリエールに向かっていく。まったく、勇気と無謀を履き違えているのか？
「カッタートルネード！」
スクウェアスペルでゴーレムの上半身を根こそぎ吹き飛ばし、偏在のほうは犯人の首に杖と兼用の剣を突きつけていた。
「まったく。無茶苦茶なやつだな君は、ミス・ヴァリエール」
「う、うるさいわね！！」
「まあまあ落ち着きなさいよルイズ」
「一件落着」
その後マチルダのうさばらしもかねて犯人は球体の岩から首だけ出している状態で王都に魔法学園の宝物を盗もうとしてつかまった愚か者として送られた。

不穏（前書き）

短いですが許して

不穏

不穏

アルビオン王国、城の会議室にて緊急の会議がとりおこなわれていた。

「ここ最近ゲルマニアへの物資の輸送がガリア方面から増えてきています」

ウォルシンガムが報告した。

「ゲルマニアが戦争の準備をしているということかね？」

モード公が眉をひそめながら尋ねた。

「しかしゲルマニアがガリアと組むような愚を犯すとは思えませんな」

会議に出席していた貴族の一人が発言した。

「確かに。そのようなことをしたらジョゼフのことだからすぐにゲルマニアに牙を剥くだろう。ただでさえ一枚岩とはいえないゲルマニアが・・・？まさか！！」

モード公は気づいたようだった。

「どうやらお気づきのようですな」

ウォルシンガムはそう言って続けた。

「おそらくガリアからゲルマニア内の反政府勢力への支援物資かと思われます。アルブレヒト三世も既に気づいていて泳がせている節がありますがもしかするとゲルマニア反乱軍は予想よりも大きな勢力を持っているかもしれません」

一通り話を聞いていたジェームズ一世だったがついに口を開いた。

「おそらく今回起きるであろうゲルマニアでの反乱はガリア政府、いやジョゼフ一世の陰謀でありその戦火はよもやするとゲルマニア併合の勢いそのままにトリスティンへと向かう恐れがある。ゲルマ

ニアのアルブレヒト三世とその側近でとくに近しいものどもとの連絡を密に行うように。そしてガリアへの対応だがまずは手始めに経済戦争を仕掛ける。今年のアルビオンの作物が不作であったとの情報を流しガリアから食料を買い占めよ。まあ、財政に無理のない程度でだ」

「了解いたしました」

「皆も今回の会議の内容をふまえ行動してもらいたい」

「「「「「承知いたしました陛下」」」」」

そして一人になった会議室の中でジェームズ一世はつぶやいた。

「問題はトリスティンか・・・・王位がいつまでも空いているのはまずい。マザリーニ枢機卿がいなかったらあの国はとうに滅びている」

しかし未だトリスティン王国王位は空位のまま世界は回っていく。

タルブ

タルブ

度重なる密使の交換の末切迫した状況に危機感を抱いたアルブレヒト三世は密約を結んでいた。そのころガリアではアルビオンの商人やアルブレヒト三世の息のかかった商人が食料を買いあさったために穀物価格が急騰していた。

「これは、くっくっくっ。やってくれおるではないかアルビオンにゲルマニアよだが、この手にはどう対応するかな？お手並み拝見といこうではないか」

そういってジョゼフ一世は盤上のチェスの駒を動かした。

そんな頃トリスティン魔法学院では

「ヴァリエールが使い魔を解雇したって？それは傑作だなキュルケ」

「そんなに笑うことでもないんじゃない？エリス」

「だって使い魔を解雇する主人なんて聞いたことがないしそんな簡単にいくわけがないだろ？解雇するなら殺さなきゃね」

「物騒なこといわないでよ」

「まあいいや。で、それで気分転換にお宝探しに行こうと地図を買ってきたわけか」

「それでエリスも行かないかな？と思ったのよ」

「う～ん。別に何か用事があるわけでもないし言ってもいいが」

「それなら今すぐ支度してきて。それからここに集合ね」

そういうとキュルケは部屋へと準備をしに帰っていった。それから三十分ほどたったころ約束の場所で待っているとキュルケにタバサに使い魔の少年そしてなぜかモンモランシー、グラモンとシエスタがいた。

「なんなのこのメンバー？」

「ギーシュとモンモランシーはお宝目当てで来たんだけどシエスタはダーリンについてきたのよ」

「まあいっか。じゃあ早く行こう」

こうして一行はお宝探しに出かけたのだった。

いろいろ探してみたもののどの地図もでたらめなものが多く成果はまったく上がらず最後の地図

「竜の羽衣？」

胡散臭い名前だな・・・

「あ！ここ私の実家なんです」

シエスタが言った。タルブか・・・ワインでも買って帰るか？そうしようアニエスと飲めばいい。

そんなことを考えていると私たちはタルブへやってきた。そこで件の竜の羽衣を見せてもらった。

「なんでこんなものがここに！！」

使い魔の少年が驚いているので見てみると以前アルビオンでレジナルド・ミッチェルとジェフリー・デハビランドが分析研究したものとよく似たものがあった。

その後竜の羽衣、少年曰くゼロ戦というらしい、は持ち主の遺言どおり同じ言語というか文字を扱う少年のものになることが決まった。そして私はワインを三本ほど買ってみんなと学園へ帰った。しかし学園へ帰ったときキュルケのもとに手紙が届いていた。そこに書いてあった内容は

「ゲルマニア各地で反乱発生。反乱軍は合流しつつ勢力を拡大中国内情勢不安定につきしばらくの帰郷を禁ず」

という内容だった。

ゲルマニア内乱　その１（前書き）

テスト前だから時間ない

ゲルマニア内乱　その１

ゲルマニア内乱　その１

反乱軍は勢力を拡大しながらウィンドポナへと進軍していった。一方その進行を阻むために立ち上がる諸侯もおり、ウィンドポナ周辺に集結しつつあった。彼らは皇帝の恩恵に預かっているものたちで現体制の崩壊を望んではいないからである。ツェルプストー辺境伯の軍もそのなかにあった。

「これだけの軍をどうやって集めたのだ」

伝令が持ってきた情報に目を通し伯爵はつぶやいた。

現在反乱軍ウィンドポナまで２００リーグの地点で総兵数２３００。

対する皇帝軍は１７０００。

今のところ劣勢である。しかし当の皇帝は涼しげな表情をしていた。

その理由が伯爵にはわからなかった。

その頃トリスティン魔法学院では

「ゲルマニアは諸侯と皇帝の同盟関係とも言える形でまとまった国家だ。この反乱はゲルマニアの崩壊の可能性を秘めているし、少なくとも今までの体制はなくなるだろう」

「分かってるわよ。そのくらい・・・でも私には何もできないの」

キュルケは悔しそうにそうこぼした。

決戦が近づくなか、反乱軍の進行予定ルートに土メイジを総動員して要塞線が構築されていた。土メイジたちが交替で猛スピードで構築しているが、やはり徐々に脱落者がでてくる。

「もう、駄目だ・・・精神力が空だ」

「お・・・俺も」

そうして築かれる要塞にシュペー候率いるメイジたちが固定化をかけていく。

反乱軍到着予定時間まであと二日となり平民まで動員した工事は佳境を迎えようとしていた。

ウィンドポナ防空戦

ウィンドポナ防空戦

ウィンドポナから15リーグほどのところに反乱軍の侵攻を迎え撃つかのように大規模な要塞線が構築された。そこに次々とゲルマニア最新の大砲が運び込まれていった。しかし反乱軍のほうも流石にこの時間を無駄に過ごしていたわけではなく陸に先行して艦隊が侵攻してきた。その報告を受けた要塞内に駐留していた部隊は一時混乱状態に陥った。しかし、その状況はすぐさまやってきた皇帝の一喝によっておさまった。

「皆のもの落ち着け！この要塞は落ちない。賊軍の空軍に我々の艦隊が遅れをとることはない。それでも不安だというものもいるだろう、ならば我が艦隊の勝利が確実であること証明するために賊軍が壊滅するまで私がこの要塞にいることをその証明としよう！！」

しかしこの最中も着実に反乱軍艦隊は接近をつづけていた。

一方反乱軍艦隊は

「遠くに敵の要塞が見えてきたぞ！！」

「所詮要塞だ。空から攻めてしまえばどうということはない」

「烈風カリンのようなメイジはゲルマニアにはいないからな」

「皆のもの！ここを落とせばわれわれの勝利は決まったようなものだ。盛大に大砲をぶち込んでやれ！！」

「「「「うぉーーーーーーーーー！！！！！！」」」」

そのときだった。

「前方に大型艦を発見！高速で迫ってきます！！」

見張りの兵士が驚きの声を上げた。

「なんだあのフネは！？」

そう艦長が叫んだ瞬間飛来した砲弾とともに乗艦は粉々になった。

その様子をみた要塞の皇帝派兵士たちの士気は上がっていた。

「やった！やったぞ！！」

「すごい戦艦だ！！」

口々にその鋼の体をもつフネを賞賛した。

そのフネの名はゲルマニア初の鋼鉄製のフネとしてアルビオンから技術を供与されて作り上げられたポケット戦艦『アドミラル・グラーフシュペー』だった。アウトレンジからの砲撃で瞬く間に寄せ集めの反乱軍艦隊を混乱に落としいれた。そして混乱した反乱軍艦隊に従来の戦列艦が切り込み勝利を収めた。反乱軍艦隊主力を撃滅した皇帝派はこれより陸空共同の反攻作戦を開始するのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7142m/

パックスブリタニカアルビオン改造計画

2011年4月16日13時42分発行